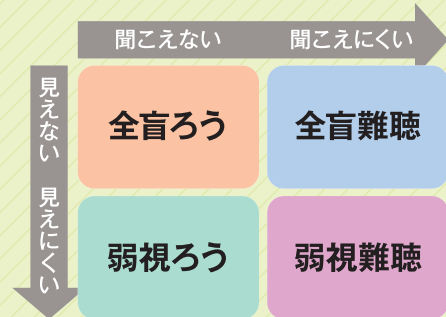


盲ろうの子どもたちの指導の充実を目指して

盲ろう幼児児童生徒に対する指導実践事例の集積と指導・支援に必要な教材・指導法のデータベース化および教員研修システムの開発研究



視覚と聴覚の両方に障害のある盲ろうの子どもたちは、見え方と聞こえ方の組合せによって、見えなく聞こえない状態の「**全盲ろう**」、見えなく聞こえにくい状態の「**全盲難聴**」、見えにくく聞こえない状態の「**弱視ろう**」、見えにくく聞こえにくい状態の「**弱視難聴**」という4タイプに大別されます。



研究の背景

● 全国の特別支援学校を対象として実施した実態調査では、弱視難聴の子どもたちが約半数を占めています。また、85%以上が視覚障害及び聴覚障害の他に、知的障害や肢体不自由などの障害を併せ有しています。また、盲ろう幼児児童生徒を担当する教員は、視覚障害と聴覚障害の的確な把握、発達段階の把握、適切なコミュニケーション手段等で困難を抱えていることが明らかになっています。(国立特別支援教育総合研究所,2017)

● 「障害者の権利に関する条約」第24条教育の中で、「盲人、聾者又は盲聾者（特に盲人、聾者又は盲聾者である児童）の教育が、その個人にとって最も適当な言語並びに意思疎通の形態及び手段で、かつ、学問的及び社会的な発達を最大にする環境において行われることを確保すること。」と明記されています。

● 「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告（令和3年1月）」の中で、「特別支援教育の教師に求められる専門性」について、「特に、障害者権利条約24条において示されている通り、盲ろうの障害に対し、最も適切な教育が行われるべきことが求められているが、実際に盲ろうの障害を有する子どもは、情報の入力や出力の観点から補完関係にある視覚と聴覚の両方に障害があるため、盲ろうの障害の独自性に合わせた指導事例の収集や、指導や支援のポイントの整理等を進め、専門性の高い教師の育成を支えていく必要がある。」と記載されています。

盲ろう教育の充実は喫緊の課題

研究の目的・取組内容

稀少性、多様性、かつ点在しているが故に立ち遅れている盲ろう幼児児童生徒の教育の充実を図るため、以下に取り組んできました。

盲ろう幼児児童生徒の指導実践事例の集積

筑波大学附属特別支援学校5校の有する専門性、知見と実践的検討

全国盲ろう教育研究会との連携
実践研究の蓄積、研修実績、ネットワークの活用

教材・指導法データベースでの発信

教員研修プログラムの検討と研修の実施



イラスト：佐藤実桜



盲ろうの子どもたちの指導・支援におけるポイント

声や音、光も届かない、届きにくい世界の中にいる盲ろうの子どもたちにとって、人の存在こそが外の世界に繋がる窓口です。安心できる関係づくりが大切です。

1 子どもの全体像をとらえること

子どもの視覚障害や聴覚障害の状態、原疾患、病名、発達段階、コミュニケーション、身体の動き、手指の働き、経験の程度、興味・関心等、日常の教育活動や家庭での様子を把握・整理して、おおよその全体像を捉えることが大切です。学校と家庭、それぞれの場での様子について情報を共有することで、多角的にとらえることもできます。

盲ろうの子ども見え方、聞こえ方については、測定不能・不明とされることもあります。検査に頼るだけでなく、日常の観察が大切であり、観察結果と疾患名などの特性から見え方や聞こえ方を推測・想像することが大切になってきます。

- 視覚障害の状態の把握については、右記を参考にしてください → <https://youtu.be/WsdPqG35v0E>
- 聴覚障害の状態の把握については、右記を参考にしてください → <https://youtu.be/yaJXG8Qi52M>

2 子どもの障害の状態に応じて情報の提示の仕方や関わりの方法を選ぶこと

視覚・聴覚障害などの状態に応じて、触覚や嗅覚を活用する等、一人ひとりに分かる方法で、必要な情報を分かりやすく一貫して伝えることが大切です。その時に、「視覚、聴覚がどれくらい活用できるのか」といった障害の状態について、そして「発達段階の把握」などが必要になってきます。聴覚が活用できるということは、言葉を理解できるということではないので、何がわかっているのかをきちんと把握した上で、働きかけをしていくことが大切です。先天性の盲ろうの子どもたちは、サインや言語によるコミュニケーションがまだ難しい子どもたちがかなりの割合を占めていますので、その子どもたちに分かる方法での提示を考えていきましょう。

3 実際の体験を大事にすること

盲ろうの子どもたちは、何気なく目にする、耳に入ってくる膨大な情報を自然に得ることはできません。直接触れるか、保有する視覚と聴覚で把握できる限られた範囲にある不鮮明な情報に限られます。また、絶対的な経験の乏しさがあります。このため、当然知っているであろうことを知らないということもよく起こりうることです。概念形成の基盤となる実体験を積みあげていくことを大切にしていきましょう。

4 子どもの興味関心のあることを学習につなげること

指導を考える際には、困難さに焦点が当てられがちになりますが、指導の効果を高めるためには、学習への意欲や主体性は不可欠です。学習への動機付けを高めるためには、好きなことや興味・関心のあること、得意なことを把握し、それを活かす視点を持って指導することが大切です。盲ろうの子どもたちは、限られた情報と経験の圧倒的な乏しさから興味・関心も限られていますが、その限られた興味関心を意図的に学習につなげていくことで、概念を育てることもできます。

5 双方向でのコミュニケーションを意識すること

子どもとやりとりする中で、感情や思いを伝え合うこと、子ども自身が伝えたい、分かち合いたい、という気持ちをもつことがコミュニケーションの土台になります。コミュニケーションを通じて、子どもが安心感や見通しをもち、生活そのものが豊かに拡がりのあるものになっていくことが大切なことです。盲ろうの子どもたちは、自然に概念を学んでいくことができないので、経験を重ねていく、経験する場を意図的につくっていく、そして、経験したことをコミュニケーションにつなげていくということを意識することが大切です。

日常の生活の繰り返しの中での動きなどからサインが生まれてきます。子どもが発している動きをフィードバックすることによって、子どもに自分の動きを意識させること、関わる人も同じ動作で伝えるといった意図的な働きかけによって、サインが共有されていきます。



盲ろうの子どもたちの指導や支援の手立てとして

データベースを
使ってみよう

筑波大学特別支援教育・教材指導法データベース

<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/kdb/index.html>

筑波大学特別支援教育連携推進グループでは、視覚障害・聴覚障害・肢体不自由・知的障害・自閉症を対象とする5つの筑波大学附属特別支援学校群の専門性の発信として、特別支援教育に関わるすべての教育活動場面において活用できる教材と指導法に関するデータベースを公開しています。

このデータベースに掲載されている教材・指導法は、いずれも各附属特別支援学校で実際に使用されてきたもので、一人ひとりの幼児児童生徒の障害や発達段階等の特性に応じて考えられているものです。

このデータベースの特長は、対象の子どもたちの実態や障害特性に対する配慮点、指導のねらい、指導場面(単元や活用場面)、期待される成果や効果などを解説して、教材の使い方や指導の様子を画像や動画で紹介しているところです。掲載情報は、現在約500コンテンツで、その半数は英訳もされています。(令和4年3月現在)

また、参照したいコンテンツを探すためには、語句検索だけでなく、障害種別・単元・活用場面をプルダウンメニューから選択することができます。そしてこの度、障害種別の中に新しく「盲ろう教育」という選択肢を加え、盲ろう関連のコンテンツの充実を図っています。是非、盲ろうの子どもたちの指導にご活用ください。

検索画面

教材検索 ※検索語句、障害種別、単元・活用場面を入力/選択すると全てに合致した結果が表示されます

検索語句 障害種別 ----未選択---- 単元・活用場面 ----未選択---- ソート順 ▼

国語	音楽	図画工作、美術	体育、保健体育	生活
家庭、技術・家庭	道徳	外国語	情報	特別活動
自立活動	日常生活の指導	遊びの指導		
生活単元学習	作業学習	就学前教育	教具・補助具	職業
理療	その他			

「盲ろう教育」

検索結果 (教材・指導法の掲載事例)

スケジュールボックス



使う子どもにとって分かりやすく、意味のあるもの(オブジェクト・キュー)を使用して、時間割や一日の流れを示します。ボックスの中に入れるものは、実物や実物の一部などの具体的なものから、抽象的なものまで、子どもの実態に応じて考えます。

ネームサイン



指導者が誰なのか、名前の印(シュシュ・ゴムバンドなど)や合図を決めて、必ずそれを使って子どもに名乗ることが大切です。誰が来たのか、誰に話しかけられているのか、視覚と聴覚からの情報がない、入りにくい子どもに、相手を特定できる情報を提供します。挨拶や名前呼びの場面で触らせます。



盲ろうの子どもたちの指導や支援の手立てとして

研修や相談の機会を
活用しよう

筑波大学附属特別支援学校群をはじめ
本研究の協力機関では、盲ろう教育に携わる
教員の研修や相談に協力します。

はじめて盲ろうの
子どもたちに接する
教員向け研修プログラム例

1. 盲ろうの概要
2. 視覚及び聴覚障害の状態についての把握
3. 疑似体験
4. 障害がもたらす困難性
5. 盲ろうの子どもたちの指導において大切にしたいこと
6. 盲ろうの子どもたちのコミュニケーションについて
7. 指導実践事例の紹介

定期的に研修会を
開催します

人事交流・受入型研修

筑波大学附属特別支援学校群では、盲ろうの
子どもたちを担当する教員を人事交流や研修
生としてお迎えします。

また、オンラインによる授業研究会や研修会、
盲ろうの子どもが在籍する学校への研修講師
や相談員の派遣なども検討しています。

オンライン授業研究会

講師や相談員の派遣



研究協力機関

機関名	所在地・ホームページ	役割
筑波大学附属視覚特別支援学校	〒112-0015 東京都文京区目白台3丁目27番6号 http://www.nsfb.tsukuba.ac.jp/	研修・相談 人事交流等
筑波大学附属聴覚特別支援学校	〒272-0827 千葉県市川市国府台2丁目2番1号 http://www.deaf-s.tsukuba.ac.jp/	研修・相談
筑波大学附属大塚特別支援学校	〒112-0003 東京都文京区春日1丁目5番5号 http://www.otsuka-s.tsukuba.ac.jp/	相談
筑波大学附属桐が丘特別支援学校	〒173-0037 東京都板橋区小茂根2丁目1番12号 http://www.kiri-s.tsukuba.ac.jp/	相談
筑波大学附属久里浜特別支援学校	〒239-0841 神奈川県横須賀市野比5丁目1番2号 http://www.kurihama.tsukuba.ac.jp/	相談
筑波大学 特別支援教育連携推進グループ	〒112-0012 東京都文京区大塚3丁目29番1号 http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/	研修受入 データベース
全国盲ろう教育研究会	(事務局) 〒112-0015 東京都文京区目白台3丁目27番6号 http://www.re-deafblind.net/	研修・相談

お問い
合わせ先

国立大学法人筑波大学附属学校教育局

[Email] fk.kyoren@un.tsukuba.ac.jp [HP] <https://www.gakko.otsuka.tsukuba.ac.jp/>